特集 注目される盛岡。守り、変えるべき価値を考える。

ニューヨーク・タイムズ紙にて、「2023年に行くべき52カ所」の二番目に盛岡市が選ばれたニュースに誰もが驚いた１月。今回は、盛岡市交流推進部観光課と盛岡の観光地を代表するつなぎ温泉にて、記事の反響や今後の観光プロモーションについて伺いました。

記事が発表された後に再来盛し、谷藤盛岡市長（左）と盛岡の魅力について語り合ったクレイグ・モドさん。（写真提供／盛岡市市長公室広聴広報課）

盛岡の良さを再認識した記事

２０２３年1月12日、米国ニューヨーク・タイムズが「52 Places to Go in 2023（２０２３年に行くべき52カ所）」を発表し、イギリスの首都ロンドンに続く2番目に盛岡市が紹介されたことは、すでに周知のことです。推薦者であるライターのクレイグ・モドさんは、盛岡市を「歩いてまわれる宝石的スポット」と評し、盛岡のまち全体が健全、若い世代が個人でがんばっている、人の優しさなどをキーワードとして挙げています。

記事では、東京から数時間で行ける便利さ、大正時代に建てられた和洋折衷の建築美の建造物、盛岡城跡公園、焙煎コーヒー店、わんこそば、本のセレクトショップ、ジャズ喫茶など、盛岡の佇まいをつくりあげる店舗をいくつも紹介。記事が掲載された直後、全国放送のニュースや情報番組で取り上げられると、盛岡市役所にも多くの問い合わせが入ったのだとか。盛岡市交流推進部観光課長（取材時点）・畑山紀枝さんに、反響の様子などを伺いました。

「顕著だったのは、パンフレットを送ってほしい等、情報を求める希望が増えたことです。盛岡市のために自分も何か関わりたいとの声も多く寄せられました。地元出身はもちろん、海外にいる方、盛岡に帰ってきた方、個人も団体も〝こんなことはなかなかないチャンスだ〟と喜び、この好機をなんとか生かしたいと言う言葉を、直接多方面からいただきました。クレイグさんが盛岡の魅力として挙げてくれたのは、皆、日常の暮らしに溶け込んだもの。それによって〝今の盛岡そのままで十分に価値がある〟と再認識できた気もしています」。

「先人が積み重ねてきた全ての、調和が盛岡らしさになっている」と畑山さん。

盛岡の魅力を市民の皆さんと再発見

それを受け、盛岡市では公式ホームページに特集ページを作成し、記事で紹介されたスポットを紹介。また、ＳＮＳ等で「私の好きな盛岡」の写真を3月10日まで募集し、共有しました。岩手山や中津川、まちの風景はもちろん、記憶に残る店のメニュー、投稿者それぞれの思い出を切り取った写真など、生活の温度を感じる写真とコメントが集まったそうです。

「熱量があふれる写真が寄せられ、皆さん、本当に盛岡が好きなんだと実感しました」と畑山さん。同課はもちろん、都市戦略室や他の部署と意識共有に努め、すぐにできることに取り組んだ年度末でした。今後は、盛岡駅での観光案内窓口増設、観光デジタルマップを拡充し観光モデルコースの紹介にもさらに力を入れ、まちなかの「盛岡 City Wi-Fi」も、3月24日に拡充。さらに今後、市内事業者の皆さんがどうやって好機を生かす取り組みを進めるか期待されるところです。

さんさ振興協議会18団体のうち、11団体もの協力で継続してきた「つなぎでつなぐ盛岡さんさ踊り」。

盛岡つなぎ温泉として県外＆国外へ。

盛岡を代表する観光地・つなぎ温泉では、今後、増えることが予想される観光客の受け入れ先として、準備を万全にするべく取り組んでいます。何より大きな出来事は、つなぎ温泉の名称を「盛岡つなぎ温泉」に変更したこと。その背景について、「愛真館」の代表取締役社長・菊地善雄さんに伺いました。

「改称は、県外の方に対し、つなぎ温泉の所在地をわかりやすくすることが目的です。以前から場所をしっかり発信する必要性を感じていました。今回、ニューヨークタイムズの記事は大きな後押しになりました。せっかく盛岡が着目されたので機会を逃さず、とつなぎ観光協会で合意。『盛岡つなぎ温泉』の名称で心機一転、県外や海外に発信していきたいと思っています」。

同温泉では、２０２０年に「つなぎでつなぐ盛岡さんさ踊り」が始まり、今年で4年目を迎えます。宿泊者を対象に、盛岡さんさ踊りを毎日披露（盛岡さんさ踊りの開催期間前後、一部冬季間をのぞく）。各施設から会場まで送迎し、無料で演舞を楽しんでもらう企画です。本来はいわてデスティネーションキャンペーン期間の予定でしたが、コロナ禍で披露の機会がなくなった団体の活動サポートおよび文化継承の目的も兼ねて、長期的継続に取り組んできたのです。

さんさ踊りをつなぎで楽しめるスタイルが定着しつつある今、「ニューヨークタイムズは絶好のタイミング。やっと本格的な発信ができる」と菊地社長。

「お客様のほとんどが、さんさ踊りを楽しみにきてくださった。これからは、手振りを一緒に体験してもらったり、踊り手との写真撮影も可能になり、本当の意味で〝つなぎでつながるさんさ踊り〟がはじまると期待しています」と菊地社長。

さんさ振興協議会に声がけし、協力して続けてきた活動は、今では同温泉の名物企画になりつつあります。今年4月には、台湾までさんさ踊りキャラバンに行く予定。「いろんなことがようやく結びついてきました。記事は絶好のタイミング。ニューヨークタイムズの紹介も含め、台湾で盛岡の価値を発信してきます」と意気込み十分の菊地社長ですが、温泉旅館に求める価値が変わりつつある昨今、平時に戻るだけでなく新しい何かを生み出していく必要性を話します。

さて、冒頭で話を聞いた畑山さんは、こんなことも話していました。

「今の素晴らしい盛岡があるのも、これまで数々の決断をしてきたまちの変遷の結果だと思います。この好機による観光客増加に向けた体制整備は必要であり、新しい動きを受け入れていく必要もあります」。

変わらないことは本当に変わらないことではなく盛岡らしく変わっていくことなのではないかと考えている、と話す畑山さんの言葉が印象的です。

温泉では、オリジナルのさんさワッフルクッキーを製造販売。宿泊客は演舞への感謝や応援を込めて購入し、その売上は団体への謝金などに当てています。